



河川早引集附合之部

元禄三  
精甚良

表振

きよの羽七かいつくろひぬ訪時  
むとくはるむ木の繁さつまる  
勝引の船えぬそ川こゑを  
輝かおどと係張の弓  
中いふふき遠いふ霞の舟  
くまらぬは名物の梨

去来

去来

九兆

史邦

葉

草

河川早引

中

横暮

おもひ切らぬ死なむしんよ

史部

中調子

青天ふる月影をけ

去来

湖水の秋は比良のゆゑ

去来

横暮

市中の病のよかひなきの母

九兆

表振

あつししことしんしのまゝ

去来

二かゝるまゝに果は種は生え

去来

灰うらうらうらうらめ一枚

兆

けの筋と根とをさるる自由さよ

去来

只ごとくやりしよきよ綴さし

去来

横暮

遠くく、早きさるるの刀持

去来

中調子

調子うらふあこりしり

九兆

戸障子の世に梅ひの女共をな

去来

てん志やうまゆりいつくをつく

去来

こもくと草鞋と作る存想し  
みちとちうし子起し神起  
こもくとちうし子起し神起  
ゆりこてせまのあぬす櫃  
草鞋ふ志しとみてハ弁破り  
命下りゆいお櫻葉のゆは  
十成しよおかくいる恵とせ  
ほ世の果らる皆小冊之

兆 草 兆 草 兆 草 兆 草

菘蓑 雨留方とるれと廣よ板あ  
管中一風運まるとしの信  
揚句 ちあふこのぬまの跡むいり

凡兆 兆 兆 兆

菘蓑 灰汁桶の草やとりまき  
表板 油かきりて雪探さる  
新を春あしとる月影よ  
あつして嬉し十の草

凡兆 兆 兆 兆

出川舟言

ふげの物さかへし子日七  
さうのさうみふしうを降る

北 甚

桔葉 おおのしふのきと休む日  
途せりしおるよりの方

聖有 去来

桔葉 町内の新もふけりぬを  
中調子 何と見るさかあさうし

去来 聖水

ふとちるが西念の夜まて  
木弓の酸基ふまもさう

去来 凡北

桔葉 旅の馳をよまゆし  
すさゆおめの登あはてあて

去来 甚心

桔葉 糸極絲いつとみ子  
揚白 十夜と三月曙の夜

去来 聖有

あし

綾乙廿东社行

積善

梅も菜鞠子の宿地とうけ

善

表振

三宮新しよす方の曙者

乙廿

雪の春晴小田み土まの比きぬや

珠成

志次とを次寝ふて下まぬり

季男

片隅尔虫出歯かしくまの母

廿

二傷のちのともれも秋

善

積善

稲の葉の乙此力なき風

孫成

五心の神よこゆる経麻山

善

積善

十亥此日尔仕と舞て踊る経机

正秀

店をたおつる竹のまかり

去来

積善

噴水の降ハをよ縁付ヒ

士芳

流ハハるふかきこくせん歌

因風

あし

元禄七  
山崎

一巻、調子

梅よりこのつと日の出る山崎

全坡

不し子解子の晴る川

全坡

家事花と女のふあはれ

全坡

上のつとこのあつと茶の香

全坡

宵の内さつとあつと舟の香

全坡

暮霞はまもも秋のつと

全坡

つと入葉さつとつと女、つと

全坡

娘とつとつと人平あつと

全坡

素つとつとつとつとつと

全坡

つとつとつとつとつと

全坡

つとつとつとつとつと

全坡

つとつとつとつとつと

全坡

つとつとつとつとつと

全坡

つとつとつとつとつと

全坡

つとつとつとつとつと

全坡

高をおひり合ひぬき、  
町家のつゞきと酔て名の傍  
門て押そ壬生の念佛  
東風かせし雲のいざねを以て  
くみるをよみ眩うつふ  
江戸の左太さのこゝろをいざ  
いざよといれとかうのり  
方くよ十次の内北かひのき

葛 披 葛 披 全 葛 披 葛

相の木さく月さくし  
門志めくたまつと梅さ面白さ  
杉さく、合て衣着るに於  
幼年平女房の親子頼舞て  
まゝ、げすまらすまぬ浪人  
法衣北陽法を道しるをいざ  
罪よとありくまら素の仕且  
よのちも東北方よわやとあけ

全 披 葛 披 葛 披 葛 披

あし



山吹舟

舟下鴨あく浪の難あり  
ちより啼きを扱しよきり半  
素もとのうらむをてぬき用  
陣しとあききに舟を連て陣  
舟その信子あたる慕子

山吹 坡 意 坡 意

山吹 彦振

苗好も世織りもさかきり  
あざとく世巨も在籍もる

山吹 利牛

片及ハ夫の小坂のかきあて  
外とてまよく子田ふお撲場  
細くと部日ころ北雷の舟  
子稲も晩稲もお生ひ生

山吹 利牛 坡 意

山吹 中洞子

醒れんてハ又白断のく  
中洞子のうらよ顔ふもあがりて  
抱あける子北小原をとる

山吹 利牛 坡 意

山吹舟

くさしとて内を物道か

披

炭俵

今も左の口とをよけ  
焚かすいふいふをよけ

壁披  
炭重

炭俵

空をこれと笑ふ事此縁  
上張を通さぬとのる方て

紙を  
大意  
感有

表振

そつと祝けを酒の裏中  
揉ふ手後と揉ておぬ宵の目  
とくいと癖のころ此風

利牛  
芸  
花

炭俵

妙とよにおいしくし  
僧部のもつ先所とや

紙を  
を

炭俵

おのちうれし福をさす

利牛

お川野

流汁をい者より能なりと  
大蔵

炭俵

息女平祖父のを弊れめて  
七世孫なるぬ七ノの思  
出有  
利牛

炭俵

つと裸父とてれと日昔并  
岩のいゝのまの白よやく  
有あう珠敷むけの生し  
利牛  
出有

表振

子力町よりむらふ西風  
等下小茶色の袖たぐりあせ  
了々をなぬとこあく人あ  
雪の月下紫の茹け<sup>ウテ</sup>るを  
掃る跡の檀ちるこ  
牛  
出有  
牛

炭俵

十二三年の衣裳の打掛ひ  
中堂よりぬきると  
利牛  
出有

古一書

は川町合

炭俵

標信子脛ふる里と投出て

孤瓦

中調子

袖のいりけを急入るる

喜細此留地よほる侍本杭

利牛

古更子もまの杉政の筆

石

炭俵

秋の空屋上の杉松をみれり

キ角

表振

おくれと一羽はつる鷹

孤瓦

船高小日傭標る貝切をえ

左

月のからしく四扉の門

角

祖父の手に火桶も落るをえ

左

侍ひるよハ丸をこえを

瓦

炭俵

豆燈の子ちしてみるハ心下り

孤瓦

息以かへと喧乱の針

キ角

古一軒

炭俵

石の下に紙を捲く

キ角

中調子

形之北林津桂の石を捲く

孤石

むしり女子あると志のこまを

角

炭俵

帯とまいたるる石を捲く

孤石

石を捲く

キ角

炭俵

石を捲く

桃隣

照

とんとあのを巻く

壁地

炭俵

石を捲く

孤石

石を捲く

石を捲く

炭俵

石を捲く

壁地

石を捲く

石を捲く

海川記

炭俵

婿平門あはる五十石  
げ島北飯鬼しよとさる

孤石  
大島

炭俵

表娘

石の松おせ口をねを  
日の出るその北赤き冬空  
下着か一被後尔赤明を  
あしとさるし大石の位  
石あはる鬼しよとさる

杉風  
孤石  
大島  
子冊  
桃梅

西米とがくれと唐よ白田地

利牛

炭俵

宵く北仔とがちて旅大工  
宵中このかる児をかひ

依二  
梅隣

元禄五

深川素

しらくてもある秘事約と唐かじ  
控えてさるし秋の新湫  
雪の月柳のこつて片まのこ

大島  
西堂  
洗茶

海川記

十三

世に...

坊にけり此先、

松山此處に擲つ此

信好の峯に

祝日の所か

ふまゆ

掛し

おま

室と徹と山

成水

堂

茶

茶

茶

茶

茶

茶

ふん

目の

こ

詠

那

子

+

町

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

歩

十

川合

十四

以七志を以て分ち給ふ  
 草之宿子地を語るよ秋の露  
 休見あつと此古子花の月  
 至る此早苗とてけを情  
 一茶語をくも証教うち来る  
 山伏を切とけけとぬ淵の香  
 澄もくく子をとるめ世の中  
 丹キ合ハ陽上戸よえ香ありし  
 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶

七三三己くと七喜あ好るし  
 系物てか尚ハ礼平あふかきし  
 七としてこめとあぬるの大日  
 機揚て山田も寺る人のあ  
 昔一片若子録さけわく  
 不防立地経新の切此木綿子  
 七と抱ぬ土冨の曲之笑  
 茶七種人くぬく花見えん  
 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶

お川合

十五



経子此にほろし子とてふ草 各

深川素

秋か子懐もる壁の掛物 西堂  
其新一弦なきて七十年ハとも思ひり 各

深川素

浅見牙家と名の有るそと外 西堂  
表振 縁館たふふむむの里 符六  
鯉野子子の福と傳ひ来と 大志

才女ハとも七草もとい 筑紫

月の名出もゆる小折文 六

深地も系千典茶の加る 堂

ウ  
あ玉方牡丹此茶の能きとて 茶

桜の葉とる茶子叶の子 茶

深川素

塚の蕨此茶の石原 西堂  
こも伝此野よめく思ふ茶の末 大志

深川素

源川集 今をやる学み職と云つれり  
車行の後子後七かくる  
山菜

源川集 日ハ赤う出る二月節日  
神总子何嘗の抱此とき神乞  
神六  
山菜

源川集 飛るを六田の柳ちり梅を  
掛 山菜よめく赤大豆の汁  
山菜

源川集 左へまき<sup>葉</sup>をこねつるの板  
字剥のよあ煮と喰ふ霜の雪  
山菜

源川集 二約せ弱子集ハ赤かつぬ山菜か  
眼 吹あけらぬ、山菜のやまを  
中三 かつる鴨かつぬ野もさへらちを  
四夕目 七野山に生えりる月  
山菜

芝茶集

生の條下無つく煙るるなり

花雪

中調子

日暮りて歸る拙り切かけ

花雪

其心を暗なき解をつき向て

花雪

深子影をよこを目茶

花雪

芝茶集

削るるいさ状のふり

花雪

古縁存し先とのぬ金のゆい

花雪

之縁

山

雪の千粒日さをして竹格子

浪花

照

礼者いすくく其の静さ

花雪

芝茶集

名月のともす互みかくし合

浪花

中調子

一分てしなき梨の切約

花雪

玉味雪の位波みかくる枯の風

花雪

ふりちすと世理おたる

花雪

山

山

本よりうらむかき去る母の傍に

去車

中ノ調子

糸ふまといつて望しりしを

浪花

よつと銀日まむふ横を

去車

山

巴人 通る 伝 せ 系 し

浪花

廿新三町の子供は松竹古徳

去車

山

けびの化物吐きつかりと

之乃

中ノ調子

氣年と舅のなをる 換 摺

去車

古居の里下りてハ候らと

去車

凍土、箱より物の出入

去車

元禄五

山

菅草は危しかきぬ 恋 ぼ へ

半枝

秋より川掙は啼死より

去車

山

碓氷商人あれたはなぬし

半枝

あし舟

十九

海川

きき 呼く 出る 弊 終

七五八

えん 光

おのの縁子物おのいおん  
けをいおんおのいおん

七五九

えん 山

小袖たのめとおの戒の師  
おのの母おのいおん

七六〇

えん 陸奥ちり

陸奥ちり 二ハ三二十六の里  
松の根おんをたつて年おん

七六一

陸奥ちり

陸奥ちり 八五七の物おん  
洞の地おんをたつて年おん

七六二

えん 百轉

手紙おんをたつて年おん  
おのいおんをたつて年おん

七六三

おのいおん

はなはた

三

百轉

松風せむしくと吹おする

古考

松子あるとけいりし書

古考

元禄  
仙遊

さゆしの虫はる刀貝はまね貝

古考

と倉と米とはみ婦かいらふ

古考

元禄  
孫格

ちあつふ小星のこねれうねる

古考

引立ちては理よ舞よめをやう

古考

孫格 義子のねつあてのし冷し物

古考

昭 ちあつとてしと蓮の格先

曲考

才三 ちあつといつその福ふ言お入る

臥高

孫格 義 月影のやもをよる雲の危

古考

仕あふと珠をふるかき昇

古考

おしあ

三

續猿蓑

きりて工束と志る照降

去考

おのろり奇子流る櫓の書

去考

續猿蓑

つりて娘と幼る月の歌

卧言

尾張てつきしきよの久よなる

去考

續猿蓑

吟かのみ舞も旧男も口まいて

去考

何その内と山伏よなる

曲歌

之禄二

曠世集

有るの心志つりふさをかぐびと

越人

眼

涙志のちるふこの泣れぬ

去考

十三坂をうめ道空祈空座よめてる

全

曠世集

里路をうせぬるのあけかの

越人

きぬくさあよりかたそくあてやうふ

去考

曠世集

破れに此訂うちなるふ矢の束

越人

二二二

見せはしりおするの掬割  
七五八

曠世系 京ちくそ嫁ゆ家子色む十寸鏡  
物おのしみる并子のまのい  
七五八 破人

曠世系 人去そいするの句い  
并瀬よ等る上座の片偶  
七五八 破人

曠世系 くのりお瓦麻の木葉を  
池をさる子に瘦てかこまよ  
七五八 破人

曠世系 酒のほげ系もくやほし  
揚句 四のそあき腰もくち  
七五八 破人

曠世系 落葉子葉今の子さけけ  
照 三おさの月見をさる  
七五八 破人

昔川舟言 二二二



曠世集

飲てりしときして茶ハあまなる  
後々来て秋も叶うる夜

全 七角

曠世集

宿る泪もあまきとて  
静は子あそびとすむ

全 七角

曠世集

念者法師ハ秋のあまき  
夕方のあまきとすむ

全 七角

芳すきとくさ茶あけの電  
有るふと念の徳也短しと

全 七角

曠世集

秋は新酒と人の醒あま  
秋はと産しいつも湯燗

全 七角

曠世集

明日は舞をる宵の月影  
中調子 志す意も醒てはわらぬ

全 七角

中調子

全

つねの医者の子安  
光雪

元禄  
未年記

蘇きさつ神楽等の南を大慈  
一豆新志あふ宵の東風  
七角  
七角

未年記

利けやと昔ふ老の紅裏  
原軍切者よ引く鳴る  
七角  
七角

未年記

てくらん見ゆる町の入口  
光雪

中ノ調子

如存呼米花の音まきやまを  
七角

うす田の宮庭と昔の  
七角

るまよの楽の孫ふぬとまを  
七角

くやしあよ風たる昔日  
七角

元禄  
韻塞

雨月園とあふ神の交遷  
七角

中ノ調子

小よき秋の音をまよ  
七角

未年記

七角

八月と縁あり乃よ小縁縁

西堂

韻塞

赤起を白も念の木陰よて  
つゝも長ふ千壺の卵カケころ

感有  
志有

韻塞

ふふ長のりさす白も筆の縁  
茶磨ウスくゆちむる姓の家

志有  
行六

元祿

才と秋

知年入子茶煮もじう名と音し  
志平古風の好るる君の節

志有  
志有

才と秋

好そやと流るるをさ来る物草こ  
乱よるとほると志もぬ年号

志有  
志有

才と秋

唐一人お志れぬ詞よなるつきと  
志りく俗も才をかある俗

志有  
志有

巻頭 はくと はの 花 此 袖 あり

眼 こ ろ ろ 茶 と 揚 む 藪 の 一 つ 家

桐葉  
七五

聞書

松風 か よ ふ 庭 の 三 琴  
堯 の 結 あ る 人 み む と を

七五

巻頭  
はく  
は  
の  
花  
此  
袖  
あり

井 か つ く あ 壺 の 糸 と な り う り

ふ ら ぬ と 云 と 酒 買 子 り

七五

与良子三

中懐寄

中懐子

あ さ ゆ く 連 音 の 奥 と さ あ 悠  
敵 よ を す む と 松 の 音  
ま の 梨 キ を 憎 子 と さ り

七五  
七五

中懐寄

あ さ り 福 と う り つ る 名 は あ  
ま け る 眉 と か く と 衣 く

七五  
七五

神債守

親と目茶とつ<sup>イニ雨</sup>曇のつれ  
解他るたうの廣葉を未名

又隣  
根原

貞亨

積虚栗

新しふ<sup>イニ雨</sup>子とたうと似他  
車あげくる<sup>イニ雨</sup>宿の落糸

轟音  
七角

積虚栗 光指、是は人とかくめを

轟音

酒買りし草菫の味

七角

積虚栗

くみぬ<sup>イニ雨</sup>戸<sup>イニ雨</sup>立る電の力  
おきとふ妹のおま<sup>イニ雨</sup>てあ<sup>イニ雨</sup>る

轟音  
七角

積虚栗

酒のこ<sup>イニ雨</sup>子<sup>イニ雨</sup>し<sup>イニ雨</sup>め<sup>イニ雨</sup>ま<sup>イニ雨</sup>の<sup>イニ雨</sup>并<sup>イニ雨</sup>居<sup>イニ雨</sup>え  
卯月の<sup>イニ雨</sup>を<sup>イニ雨</sup>と<sup>イニ雨</sup>扱<sup>イニ雨</sup>る<sup>イニ雨</sup>つ<sup>イニ雨</sup>く<sup>イニ雨</sup>子

執筆  
七角

孩虚栗 老の才は健ま福ふかきりる  
君匠さあし 祿の閑書  
由之

其の日 雲月之都のつくし年死て  
眼 其の朝日やあまきこき  
其の

元禄三  
乙巳二  
本のもこみ汁も乾も桜あは  
眼 西日のゆりふよまを元あり  
珠の

乙巳二  
入の子流坊の南場のツカ方茶  
中も七世いのうよ山休  
曲水

元禄三  
花摘  
写子中とろく片女敷の書  
監人よつれ系妹の才をほく  
物雪

花摘  
お墓へのたうらへて如しおき  
琴風

あり言

二九

妹を祿むあひの繁しよ  
大角

花摘

鴨よしるを御田守のまを  
子の句とくよ母の解はく

曲あり  
大角

花摘

あぬ人子酒買すとからん  
さてよい丹とほめくみこ

曲あり  
大角

花摘

何者のとらさしむるのほ  
のちさくして角士の白雪

曲あり  
大角

花摘

振袖の御縁控るあの上  
惚と子細と深の心種

曲あり  
大角

花摘

生衣よきしてあつて  
くま園たはは紫なるこ

彫棠  
大角

花摘

山崎合 三

花摘

灯をよせらまを燈の皮  
こゝろを傳ふる心

ト宅  
寺角

巻八

照 田村とよ子の娘の朝起

如京  
寺角

え禄

秋の意

降はまをの通る白眉  
中、洞子の助と問人より入る

平砂  
可洞

茶室

茶室

秋の意

ふるうお梅の二幸ふ肉桂  
おらまをたみさくたる子松

茶室  
寺角

秋の意

ふるうお梅の二幸ふ肉桂  
おらまをたみさくたる子松

茶室  
寺角

おらまをたみさくたる子松

茶室



神代卷 三十一

秋の音

孫と母とを母の泣き  
を真このあけの風といふ

介哉  
大角

秋の音

あまの葉の縁ふしよ  
秋の音と下詠の音

介哉  
大角

秋の音

悠々も閑心と見ゆる遠あり  
鷹の目流るる早はるる母

神叔  
大角

秋の音

何れ形子部るれをま  
京吹礼のつらき縁を

神叔  
大角

秋の音

花の時分す一日の傳  
二万文非人よこぬ秋の夜

神叔  
大角

秋の音

古の母葡萄の勝は葉の  
秋の音

大角

神代卷 三十一

表帳

杭柏の世原白田一ちる

固太

船高方モカリ上流越のまぬと際止

孤在

ととていこといる川口の書

利牛

唐の名が唐商人の習り

丈

に糖を志する封つきの録

角

表の書

美且那行ホリをい歌の志をいれて

利牛

中調子

と念のかつる燕の一石

孤在

蘇は子母あるは月也おしす

丈

先有あつはほ子白似

固太

表の書

ふとたと種をを配くこと

固太

けほと子けしあ

丈

表の書

秋の名残のなる林実

丈

中調子

悦至もいつう木葉よかろし紙

利牛

表の書

三三

陸者よ古くは酒をさしお

孤五

之祿  
後う家

識地の玉壺子り存本立  
甲女の根方ハ雪の積木

炭屋  
キ翁

後う家

左近此言ハ存ぬか可也  
た、い、う、く、の、か、ね、と、い、ふ、さ

キ角  
炭屋

後う家

家博中かまのちまき細る事  
かく控一才と記走心用

女磨  
キ角

後う家

女房古念のけよハハ日影  
いさハ孫まぬ細工多々

拳白  
炭屋

後う家

女磨と起さちこの女家  
番入の弁とよありこはる

女磨  
炭屋

出川舟

唯う家 口こいせ世をわらうる買 女替

中、調子 ころひていせ暮らよこれぬをの上 岸白

余はのくでさと遊くといを 宗雪

後う家 供了おとうきふようふにいあ 孝下

糸の早しの秋をこ 七角

後う家 大男涼この持をつくといり 氷花

梵天ふるくし雲の志くしこ 雲下

之禄三

其帛 縁のぬるいあつとならぬら 万里

中、調子 衣とあそ母のふけりし家目 炭雪

志くし世をみるは人の顔 七角

其帛 玉告し難はハカとむ古都 炭雪

蚊のちくくも山と論茲 七角

山崎合

其体

由骨の供してお國をとり  
近ま子あはぬ泪もかき

万里  
炭雪

其体

祿ある男先の小男  
いつるもそなく医者の遠見

兵作  
炭雪

其体

佛位教よ、おあかす宮  
塗土岳のくくてもいり白田吉

炭雪  
桐雨

其体

洞ミラへなる形足の靴も生に  
何も焼火子居おしり

沾荷  
下巻

之祿  
白兄才  
錦繡細

あ四こ半ふるはぬいじり燈の音  
肩てやしあふたる昇り就

彫棠  
七角

白兄才

兵をふるふしくもやく

彫棠

出川舟

三十一

海跡緋 又ぬ方此世に人よ恋とまらぬ  
中調子 すまらぬ中分からと年 七角

白足才 才の目と十里あり 七角  
海跡緋 一ふりうき新よせらるる草花

夕足才 夕日や来るふかしの顔 七角  
海跡緋 秋恋と人の内縁とあはれ

元禄 雁書通 生て世ふおれらる老角力 七角  
海跡緋 元より原此情かゝらん 七角

銀書通 今来んといひをりか床より 七角  
海跡緋 火徳と誰生をいふし解りた 七角  
中調子 形かく恋の根と来よりと 七角

海跡緋

三二

錦織

少づい乾色紙の尻テのイかりらん  
亀おのおもも人の代ヨ目

普松  
寸角

錦織

顔の志ろさふかく先ノのシ  
振袖と刀のノりル赤キ折セ也

普松  
寸角

白足

二三俵換振キ草ク妻メたタのノりリ  
了リ子コ中ナカまマさサとトおオしシるル人ヒト

介哉  
寸角

錦織

白足

そのノくクとト為ナ勢セとトのノ大オ時トキ目メ  
とトめメはハおオ志シめメ志シとト志シ心ココロ

介哉  
寸角

白足

一時ハ揚ノるルのノ膝ヒザをオつツまマりリ  
腹ハラ之ノとトるル子コ紙シとトくクとトくク

紫紅  
寸角

白足

やいあくとト追ツ行ユク舟フネのノ舟フネハハとトきキ

紫紅

白足

三十一

海疎經

一向宗の南无阿弥陀佛

牛角

白足弁  
海疎經

小屏風と川を櫛の鑿口  
町せとく信子とかけと踊る

山崎  
牛角

白足弁  
海疎經

利米葡萄社のきりなまきり  
扇北下りまいる虫たぐさ蛭

山崎  
牛角

白足弁  
海疎經

大村いも望人のあくらり  
場ま白しろ字あかさはらてるきりのこ

山崎  
牛角

白足弁  
海疎經  
白目

花のほよむとくは夏ふ遠千浮  
ゆつあはきと艶とバぬる

介我  
牛角

白足弁  
海疎經

おいとぬまはあはれ家の風  
白紙あくるこの汁はき

牛角  
牛角



句足才  
孫補經

若とよるまゝ氣生るや  
俗と學耳を定るる山おぼし

占法  
女角

句足才  
孫補經

傷りちよ卯の目利筈ふらん  
酔へもちかろのはまきいぬ城

占法  
女角

孫補經

瀧のねとげ次の子いふ葉をひ

仙化

子ハ秋ふなる老の小便

女角

孫補經

十はくふさちにて見えまゝ栗せの  
枝入よまゝるにみよる葉

占法  
女角

孫補經

書匠のねを束とりし酒の時  
只方の秋見えよかけ上る山

占法  
女角

信濃

葉のくぬきとよむのたぬ

彫葉

葉のくぬきとよむのたぬ

木角

信濃

木の子結とるゆる松の姓さ  
糺るかと木代志し人の風

彫葉

木角

信濃

緑とよむとよむのたぬあり  
木堂とよむとよむのたぬ

彫葉

木角

信濃

